

オアシス21 療養棟介護

症 例 概 要 利用者 : 90代 女性 要介護5

利用期間: 2022年5月 ~ 現在

病名: 多発性脊椎圧迫骨折 骨粗鬆症 変形性膝関節症 および 頸椎症性脊髄症 心臓弁膜症および 高血圧症 慢性呼吸器疾患

経過: 2012年の頸椎症手術後、下肢麻痺を抱えながらも杖・伝い歩きで自立した在宅生活を継続。2019年に椎体形成術や総胆管結石の治療を受け、右手不自由等の制限はありましたが、夫の介護と訪問看護により在宅を維持しました。2020年、夫の他界を機に介護支援目的で当施設へ初回入所。車椅子主体ながら手引き歩行可能な状態を保ち、2022年2月に退所。その後、小規模多機能サービスを利用していたが、慢性疼痛や不眠の悪化により追加処置が必要となり、同年5月に再入所となりました。

内 容

2022年5月に入所。身体機能の低下に伴い車椅子介助での生活を送っていたが、2024年6月の移乗介助中に発生した「ずり落ち」を契機に、両下肢の疼痛を強く訴えるようになった。この事故後、身体的苦痛だけでなく、職員に対し「憎たらしい、恨めしい」といった不信感や攻撃的な言動が見られるようになり、離床を強く拒否する状態が続いた。

まず疼痛の状況を多職種で共有。支援方法を統一し、ご本人の負の感情を否定せず傾聴することで、精神的な緩和に努めた。入浴への意欲は維持されていたため、入浴時に限り2名体制での慎重な移乗を実施。それ以外の時間はベッド上での食事が常態化し、一時期は攻撃的な発言が消失したものの、代わって何事にも無気力な状態（アパシー）に陥った。リハビリ場面では離床に向けた基礎的な体力づくりを継続し、ご本人のペースに合わせた関わりを根気強く継続した。

介護職員は「他者との交流」を促すため、折に触れて食堂での食事を提案し続けた。拒絶が続くなか、ある日の入浴後、信頼関係に基づいた自然な声掛けに対し、ご本人が「(長く座る自信はないが)行ってみようかな」と自発的な意欲を示した。2名体制で身体への負担を最小限に抑えた移乗を行った際、ご本人の口から「痛くなかった、大丈夫」との安堵の言葉が聞かれた。

食堂での食事再開を機に、ご本人の表情は劇的に明るくなった。「みんなと食べると美味しい」「一人は寂しい」といった本音と意欲的な言葉が引き出され、笑顔が戻ったことは、ご本人にとってのキラッと光る「輝きの一日」となった。

本事例は、一度失われた信頼関係と離床意欲を取り戻すために、多職種が諦めずにご本人の感情に

寄り添い、適切なタイミングで「小さな成功体験（痛くない移乗）」を提供することの重要性を示している。ご本人のQOL向上のみならず、支援した職員にとっても大きな達成感とやりがいにつながる事例のためキラキラ介護賞候補として推薦させていただきます。

【関わった職員】 Our Team 連携

【介護】 タイミングを見計らい声掛けや関りを無理強いしないよう工夫

【看護】 安楽な体位の工夫にて身体的疼痛緩和支援、他ご利用者との対話の機会をもうけ精神面の安定支援 【CM】 意向の確認、多職種と共有、活動の支援

【PT】 食べこぼしせず安定して長時間座れるポジショニングを職員に指導。筋力耐久性の維持向上

【栄養】 食形態や嗜好の確認。状態に合わせた柔軟な食事提供方法の提案